No.21 March 1996

Womanspirit

逐次刊行物
平'8年.2.27
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

女と国家―観念による呪縛―A『古事記』（十八）……河野　信子　2
女たちの戦争・戦後責任……奥田　暁子　4
原爆投下の責任性……渡辺　典子　7
戦争体験・責任の継承をめぐって……鶴岡　瑛　11
但馬の国のお葬式……下村美恵子　22
櫟ノ会の人々……山田　恵子　29
世界女性会議・NGOフォーラムに参加して……千葉　悦子　32
新入会員からのメッセージ……岡村　聡子　38
編集後記……41

表紙台字　松尾紀子／シンボルマークは「霊」を表す象形文字です。

女と国家
―観念による呪縛―

A『古事記』（十八）

河野　信子

老婆　（『古事記』小碓命の西征の項・熊曾建（くまそたける）兄弟殺害の場を読む）

「童女（をとめ）の髪の如その結はせる御髪を梳り（けず）り垂れ、その姨（をば）の御衣御裳（みそみも）を服（け）して、既に童女の姿にありて、女人（をみな）の中に交り立ちて、その室（むろ）の内に入りましき・・・」

姨とはヤマトヒメ。御衣御裳とは、神女（ひめ）の衣。この時すでに、熊曾建はこの装いに霊格を感じとっていたのではありますまいか。

若い女　熊曾建兄弟「見感（みめ）でて」とありまして、これが現代の私たちの想像力がためされるところのように思われます。

現代風にいうならば、ちょっと可愛い少女がいたので兄弟ふたりの間に坐らせたようにとれます。美人のコンパニオンについての言及のように読んでしまいますが、一筋縄ではいきません。この時代（といっても『古事記』企画の頃）には、類似の話は、かなり拡っていましたようで、女の父親殺しの話も出てまいります。（『日本書紀』景行紀）しかも、娘による王権排除の手段として。

老婆　先号で貴方様が例示してくださいました西宮紘氏の著書にも、ヒメ衣だったから、クマソタケルは、呪縛されてしまったとあったと、書かれていました。現代では、どのような服装をしようと、誰もそこに霊格など感じはしませんな。霊格どころかステータス・シンボルさえなくなっていますようで。

若い女　神主の衣で歩けば、三河万歳の芸人と思われかねません。巫女さんの衣装でも、アルバイトの女子学生ぐらいしか見ていないようです。巫女といった言葉も、まぎらわしくなりました。昔にかえって神女（ヒメ）といったほうがはっきりいたします。神女となる女たちは、この国に残っていますか、それとも消えてしまったのでしょうか。

老婆　祈祷師になってしまったと思っている人はいるでしょうね。ただ祈祷師も、癒しに集中する人と、脅しをかける人に二分されましたようですが。あら、ヤマトタケルの話をしていた筈なのに。私がステータス・シンボルなどと、脇見をいたしましたばかりに。

若い女　宴酣の時（儀式めいていたのか、乱れ騒いでいたのか、さっぱりわかりませんが）、ヤマトタケル（小碓命）は急に凶暴になります。兄クマソの衿をわしづかみにして、胸を刺し、逃げる弟タケルの背中をつかまえて、尻より剣を差しとおしたとあります。

老婆　人名にも霊格があった時代、ヤマトタケル（小碓命）は、名も身分も告げるとなっています。名を告げることは、魂を分け与えることとされた時代にですよ。

若い女　だから、クマソタケルの名をもらって、ヤマトタケルとなったのですか。ただの英雄物語ではない謎を感じます。この後の暴力がまたすごい。熟した瓜を析くように、析き殺したとあります。ここを読んでいますと、私、南京大虐殺を思い起こしてしまいました。

老婆　出雲系神話との差異の相が、はっきりと示されています。「言向け」ではどうにもならぬ、支配原理のほころびを見せたようなものでしょう。ここで、対立する系を持ったいくつかの神話があったと見ることもできましょう。『日本書紀』のほうは、夜なかの暗殺劇にして、妙になっとくさせようとしてはいます。

若い女　『古事記』の語り手と書き手と聞き手たち（三者合成の場があったとしての話ですが）は、ヤマトタケルへの共感を持つことができなかったのではないでしょうか。

（この項つづく）

＊＊＊　シンポジウム予告　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊　今年はフェミニズム・宗教・平和の会　＊

＊　が十周年になります。これを記念して　＊

＊　シンポジウムを開催する予定です。　＊

＊　テーマ　女性・国家・宗教　＊

＊　期日　一九九六年六月第三又は第四（土）　＊

＊　講師　大越愛子、川本隆司　＊

＊　李文子（イ　ムンジャ）　＊

＊　＊＊　どうぞ予定に入れておいて下さい　＊＊＊＊

女たちの戦争・戦後責任

奥田　暁子

「戦後五〇年」たって、戦争・戦後責任の問題がやっと本格的に議論されるようになった。「従軍慰安婦」問題をはじめとする戦後処理がまったく未解決であったこと、沖縄の人びとが戦争中に払った犠牲に何の償いもしないまま、再び彼らを犠牲にして戦後五〇年の「平和」と繁栄にぬくぬくとしてきたことにやっと私たちは気づいたわけである。ここまでくるのになぜ五〇年もかかったのか？　それはなによりも政治の怠慢であるが、この点については多くの人が論じているので今回はもう少し別の視点から、すなわち、女たちの問題として考えてみたい。

日本の近代は女性が徹底的に抑圧された家父長制社会であったと言われてきた。たしかに一面ではそれは真実である。しかし女性＝被抑圧者という見方だけではあまりにも単純であるし、ある意味では間違いでもある。いまわたしは近代女性史の年表つくりをしているのだが、年代を追っているだけで、女たちがいかにバスに乗り遅れまいと周りに同調して行ったか、とくにいわゆるエリートと言われる女たちがいかに自ら進んで体制に協力していったかがわかって、愕然とする。

女の戦争協力についてはよく高群逸枝が槍玉にあげられ、彼女が最大のイデオローグであったかのように言われているが、ひっくり返ったのは高群だけではない。吉岡弥生や山田わかはもちろんのこと、平塚らいてう、市川房枝、久布白落実（矯風会）、羽仁もと子（『婦人之友』の編集者・自由学園の創立者）、木内きょう（女性初の小学校長）、井上秀子（日本女子大教授、後に学長）などなど、当時名前の知られていた女性はほとんど一人残らずといっていいほど戦時体制に協力している。

一五年戦争開始時点ではまだ政府から一定の距離を置き、参政権運動に力を注いだり労働運動のよき理解者であったりした彼女たちが、赤狩りがきびしくなり、組合運動家や女子大生の検挙が相次ぎ、愛国婦人会や国防婦人会が組織を拡大して発言権を強めるようになる一九三三、三三（昭和七、八）年を境に、その姿勢を大きく変化させていったようである。

たとえば一九三七年には教育審議会委員に吉岡弥生（唯一の女性委員）、国民精神総動員中央連盟の調査委員に松平友子・井上秀子・久布白落実・市川房枝・丸岡秀子が任命されている。以下年代順に追ってみると、一九三八年―中央物価委員に山田わか。大蔵省貯蓄奨励

委員会委員に羽仁もと子・大江スミ。国民精神総動員中央連盟委員に吉岡弥生・山田わか・市川房枝・井上秀子ら女性十一人。東京府廃品回収委員会委員に吉岡・山田・井上。東京府物価専門委員に守屋東・河崎なつ・村岡花子・金子しげり。厚生省中央社会事業委員会委員に吉岡弥生・山田わか。

一九三九年―国民精神総動員中央連盟理事に吉岡弥生、委員会委員に竹内茂代、幹事に市川房枝。厚生省臨時軍事援護部の指導員に金子しげり・山田わから女性九人。厚生省国民体力審議会委員に井上秀子・竹内茂代・藤村トヨら。軍事保護院専門委員に竹内茂代・福島やす。厚生省労務管理調査委員に奥むめお。

一九四〇年――国民精神総動員中央本部参与に吉岡弥生・竹内茂代・市川房枝ら女性八人。国民精神総動員中央本部贅沢全廃委員会委員に大妻コタカ・高良トミ・金子しげりら女性八人。大政翼賛会文化部に山室善子。大政翼賛会臨時中央協力議員に高良トミ。

一九四一年―産業報国会厚生局生活指導部嘱託に赤松常子・谷野せつ・大島美代・渡辺松子。大政翼賛会調査委員会委員に竹内茂代・市川房枝・羽仁説子・奥むめお・小林珠子・古川八重子。大政翼賛会第一回中央協力会議員に木内きよう・高良トミ・桐淵とよ。

一九四二年―大政翼賛会調査会委員に氏家寿子・竹内茂代・小林珠子・松岡久子・高良トミ。大政翼賛会第三回中央協力会議議員に桐淵とよ・羽仁説子・村岡花子・山高しげりら九人、という具合である。

彼女たちにしてみれば、進んで政府や軍部に協力したわけではなく、女性の声を少しでも反映させるために審議会や協力委員会に入ったのだということだろうが、これらの審議会や委員会が満蒙開拓を成功させるべく大陸に大勢の花嫁を送り出し、パーマネントや奢侈品着用の「贅沢」を禁じ、貯蓄を奨励して、戦争協力に女性を総動員するための政策を推進したのである。また、このような委員にならなくとも、住井すえや平塚らいてうのように文章や講演を通して時局に協力した女たちも大勢いた。

そしてもっと驚くのは、戦争中、国の政策にあれだけ協力し多くの女たちに戦争協力を呼びかけた女性指導者たちが、敗戦から一夜明けるとまるで何事もなかったかのように、今度は民主国家のリーダーとなって活動しようとすることである。たとえば、敗戦直後の一九四五年八月二五日に結成された戦後対策婦人委員会を組織したのは市川房枝、山高しげり、赤松常子、山室民子、久布白落実などであったし、十一月に結成された各政党の婦人部長に赤松常子（日本社会党）、吉岡弥生（日本自由党）、村岡花子（日本進歩党）などが就

任している。まさに破廉恥と呼べるような一八〇度の姿勢の転換である。

このような彼女たちの方向転換は今日のフェミニズムを考えるときにも大きな示唆を与えてくれる。かつてウーマンリブが日本に登場したとき、リブの活動家たちを揶揄し彼女たちから目を背けていたのはマスコミだけではなかった。多くの女たちも自分たちをリブと区別したがった。ところが、「女の時代」などと言われ、行政が率先して女の声を政策に反映させるようになり、フェミニズムが社会的に認知されるようになると、これまで女性解放に批判的であった人びとまでが、時代から取り残されないために、フェミニズムやジェンダーという言葉を好んで使うようになった。このような無節操な方向転換をみていると、女たちもまた五〇年前とほとんど変わっていないことがわかる。

かつて権力を志向する生き方を批判してフェミニズムを論じていた女たちが（全部とは言わないが）、今や大学や自治体の要職に就いたり、一人でいくつもの審議会の委員を引き受けていたりと、男性と変わらぬ権力志向になっている例をたくさん見かける。女が政策決定の場に入ることが女性の状況を改善する重要な足がかりになるという人は多い。たしかに地方自治体の議員になって地域のために頑張っている女たちを見ると、その説は一理あると思うが、安易な期待は禁物である。それはかつて吉岡弥生や市川房枝が期待したことであり、結局は幻想に終わったのであるから。「主流」に入る女たちが増えたにもかかわらず、現実の女の状況はむしろ、より厳しくなっている原因を考えなければならない。

家父長制を批判し、それを乗り越えることをめざすのがフェミニズムだとしたら、ヒエラルキーのなかに取り込まれてしまった人びとが家父長制を批判できるとは思えない。リブからフェミニズムへの変化は体制外から体制内への移行でもあったのだろうか。そうであれば、フェミニズムが「死に体」となるのは当然という気もする。

わたしは戦争・戦後責任は政府だけの問題でなく女たちもその一端を負わなければならないと思う。それは、これまでに述べてきたことの他に、私たちが韓国の女性たちから提起されるまで「従軍慰安婦」問題の存在を知らなかった。いや少しは知っていたとしても声一つあげることをしなかったからである。これこそまさにフェミニズムが取り組まねばならない問題であったにもかかわらず、長い間見過ごしにしてきたのは日本のフェミニズムが行政主導のフェミニズムになりはてていたからであろう。私たちはこのフェミニズム

の変質を確認することから戦後五一年を始めなければならない。

原爆投下の責任性

渡辺　典子

今年は、戦後五十年ということで、様々な特集があった。「フェミニズム・宗教・平和の会」の特集においても真宗者の田ノ倉氏が「戦後五十年と私」との題で、「戦後派」と呼ばれる「昭和一桁」世代のまとめをされていた。

私も同じ真宗者であるが、平和・宗教に対して、田ノ倉氏とはかなり異なった認識を持っていることを改めて感じ、田ノ倉氏の書かれたまとめの要点を、私なりにここで考察したいと考える。

そのことは、私と田ノ倉氏の世代間の違いや、宗教が社会の問題にどう関わるのかという大きな問題にも関連していると思われるので、結論めいたものは出ないかも知れないが日本人の残された課題というものを考えていきたいと思う。

まず、要点の第一は、「一、太平洋戦争について―私は太平洋戦争の開戦と敗北を何ら後悔していない。敗北したお陰で―民主主義と思想表現の自由を得たから」とある。つまり氏は、天皇制国家による十五年戦争の遂行と敗北により、国民主権の民主的で思想表現の自由を保障する国家になったことを称賛された。

このことに私は、異論をはさむ気はないが、原爆投下の正当性の根拠が全体主義より民主主義を守るためとされていることに、複雑な思いがする。すでに、第二の要点に入ってしまったが…、この田ノ倉氏の第二の要点は、色々と問題にすべきことが含まれていると考えている。

「二、広島・長崎への原爆投下の正当性について―この問題について日米双方で激烈な論争が続けられている。但し両者の論争は所詮水かけ論に過ぎないようだ。この解決は真実の宗教的信仰の確立以外にはないようである。原始・古代の戦争・武器も、二十世紀末の戦争・武器も、その残虐性という点では、本質的には同一である。つまり人間の〈罪業〉は永劫に変わらないと云うわけである」とある。

これは宗教者が社会の問題を語る時によく見られることであるが、その社会の問題を分析し論じることなしに、人間の〈罪業〉でかたづけてしまおうとする。そのことは、一面、真実であろうが、それならばわざわざ宗教者が社会の問題を語る必要はないのではないか。私は、宗教者が社会の問題を語る時には、宗教者の信仰ばかりではなく、それなりの社会分析をし、それをどう自己の信仰に結びつけるか、また、自己の信仰よりどう社会をみるのか、その視座を持つことが大切と考えるので、社会の問題をすぐ信仰的な人間観と結び付け結論づけることは、あまりに短絡的な解決に思われる。

そして、法然の父の遺言をもって「敵を恨むな。復讐を思うなら、争いはいつまでも絶えないであろう」が、原爆問題の解決案であるとするならば、原爆の被害者は、ただただ、傷ましい犠牲というだけで、そのことによる人類の学びというものは等閑に付されてしまうのである。

これでは宗教は単に「現世のあきらめを説く」と非難されても仕方がないことになるのではないか。私はもし宗教者が平和を願うなら、もっと積極的に現実の社会の問題を具体的に考え、様々な社会分析を宗教者の立場からするべきと提言したい。

原爆投下について、田ノ倉氏は、日米の水かけ論と言っているが、リベラリズムの社会正義論で有名なジョン・ロールズは『ディセント』の戦後五十年の特集で、「原爆投下はなぜ不正なのか?」という論証をしているので、それに沿って考えてみたい。

私は戦争肯定者ではないが、民主的な民衆の戦争遂行を律する諸原理は、「戦争に対する法」と違って、いったん始まった武力紛争において、どのような行動が許されているかを定める戦争における法＝武力紛争に関するルールの問題である。

民主的な民衆は非民主的な（とくに全体主義的な）国家とは異なった戦争目的を設定する。第二次大戦期のドイツや日本のような非民主的な国家は、傘下におさめた住民の支配と搾取を追及し、ドイツの場合は統治下の民衆の奴隷化まで目指した。まともな民主主義国の対戦国は非民主主義的国家である。その国が領土拡張に躍起となれば、こちらがわの民主政体の安全とその自由な諸制度は脅威にさらされることが想定される。しかし、交戦国は民主的でない国家であるため、その社会の非戦闘員・民間人は戦争を組織し引き起こした張本人ではありえない。

戦争を起こしたのは、相手国の指導者・要職者たちであって、民間人は多くの場合、何も知らされておら

ず、国家のプロパガンダに感化されていただけなのであるから戦争犯罪人ではない。つまり日本においても、その責任があるのは、天皇制国家の要職者であり、一般人には、その戦争遂行の責任は問えないとする。そして戦争を遂行した民主社会側も、戦争目標と国際関係のありようを示すべき義務の大半は、民主的民衆の政府指導者、要職者の双肩にかかってくるのだから、彼らが動乱と危険に満ちた期間に指導者を務め、模範的な実行力とリーダーシップを発揮した場合、偉大な政治家と讃えられる。とりわけ政治家は、正義にかなった平和を実現するために、そのことについて困難な事態を避けなければならない。

すなわち、ひとたび平和が再建されたなら、敵国民が自分達の独立自治体を維持することを認められ、それなりの生活を与えられなければならないということ。敵国民が彼らの指導者にどのようなことを吹き込まれていようと、また必ず報復措置が下されると観念していようと、彼らは降伏後、奴隷や隷属民として扱われてはならないし、彼らの自由を行使させないようなことがあってはならない。

このような民主社会の「戦争における法」で、ドイツ人や日本人は降伏前には、享受することのなかった様々な自由を手に入れることになったのである。

しかし、このことは田ノ倉氏のように、開戦と敗北を決して後悔しないということと、原爆投下への恨みも、本来、戦争は人間の〈罪業〉の問題であるから、そのことは問題にしないで信仰を確立しろと言うのは、やはり問題のすり換えに近いのではないだろうか。

では、前述の民主社会の「戦争における法」において、原爆投下が正当であったかどうかが、議論されるべきであろう。

一例をあげるとすれば、イギリスがハンブルグやベルリンの市街地を爆撃したのは、ヨーロッパ文化における立憲民主政治の危機と、ナチズム特有の害悪と、それが文明社会にあらわにした甚大な害悪ゆえであるとされる。しかし日本との戦争において、アメリカ側にはそのような極限的な危機は存在しなかったし、第二次大戦勃発直後に、ルーズベルト大統領が無差別爆撃という非人間的な蛮行を敵味方とも犯してはならないと力説したにもかかわらず、一九四五年にいたると戦争の重圧が絶えずかけられていたため、原爆は投下されてしまった。

この広島への原爆投下を正当化してきた論法に次のようなものがある。一、戦争の終結を早めるためにこそ、原爆が落とされた。二、アメリカ軍兵士の多くの生命を救うためだった。そこでは日本人の生命という

ものは、戦闘員であれ、民間人であれ、ほとんど取るに足りないものと見なされていた。その証拠にトルーマンは（長崎への原爆投下の二日後、原爆使用に抗議する教会からの手紙に答えて）日本人を野獣と言い切り「野獣として扱う以外にない」と述べている。三、原爆が投下されたことで、天皇と日本の指導者たちは面目を保ちながら、退路を手にいれた。これは、どの時点か、私の持っている資料では明らかに出来ないが、天皇は退位しなくてもよいとの約束を米国政府から手に入れた後の降伏であったとされる。四、ロシア人たちにアメリカの国力を印象づけるため。

以上の正当化に用いられる論拠に対してロールズは、原爆投下の問題は、いかに戦争状態と言えども、危機に基づく免責事由が当てはまらないとし、当時のアメリカの指導者達、トルーマンの政治家としての資質を問い、公共的な政治文化の不在を指摘している。つまりアメリカが民主的社会であるならば、アメリカの国民は、原爆投下の前に日本との和平交渉を試みるべきであり、また日本の政府でなく、日本の民衆に対してその責務を持っていると論述している。

そして「戦争は地獄だ」によって表現され、その地獄の終結のためなら、どんな手段を選んでも良いとする考えや、戦争に突入した以上、皆有罪という同等な立場にあるのだから、誰も他者（他国民）を非難することはできないとの教説は、自分達の都合の良い言い逃れと、道徳的には空っぽのニヒリズムとして不当であるとし、どんな非常時においても、全員が同程度に有責だとか、あらゆる道徳的・政治的原理の抑制から免除される時のないことを鋭く指摘した。

このロールズの論述した「原爆投下の不当性」は、仏教者がよく言う絶対平和論とは違って、たとえ戦時においても守られるべき民主社会の諸原理によって、原爆の不当性を論述しているのである。そして、誤解されたくはないのだが、この論述を紹介したから、私が戦争を容認しているのではない。しかし、宗教者に限らず、十五年戦争下の民衆であれ、原爆の犠牲者であれ、誰れも好きでその犠牲となったのではないだろう。ゆえに、田ノ倉氏の原爆投下の解決案が、戦争遂行の、指導者の責任性を全く問題にしないで「恨みを持つな」と結論を出してしまうことに、私は抵抗があったために、あえてロールズの論を出したのである。

そして真宗、親鸞聖人の人間観も「つぶてのような我等」と述べているように、民衆からの視座であったことは改めて言うべきことではないかもしれないが、付け加えて置きたい。

戦争体験・責任の継承をめぐって

鶴岡　瑛

十九号、二十号の戦後五十年特集を読んで、今更のように感じるのは、五十年という年月の長さと、逆にあの戦争の意味、責任の所在について国民的な合意を計らず、きちんとした謝罪もなしに不明朗な形での〈補償〉しか行なわずにやり過ごしてきた年月の、無内容ゆえの短さとである。そうした〈補償〉の責任は、必ずしも日本側だけのものではないと思えるが、その結果は、斎藤七子氏が『強制連行と戦後五十年』の中にいみじくも〈追加犯罪〉という言葉で示されたように、当然の補償を受けられず長い間苦しみ続ける人々を、黙殺するという新たな罪を、日本国民全体に背負わせるものとなったのではないか。

今問題になっている金融不祥事と同じく、しかるべき時期にきちんと責任の所在を認め、処理しなかったために、長年の利息が積もり積もった結果の重大さに、圧倒され途方にくれているというのが今の日本人の状況であろう。頻発している政治家の歴史認識をめぐっての〈妄言〉も、その一つの表われと考えられる。

斎藤氏が詳細に書かれているような事実に対しては、一日本人として言う言葉もない。それはまた一部非道な日本人の行為というに済まず、軍、政、官、民こぞっての犯罪であったという点で、五十年を経てそうした体質の清算がどの程度できているのかという鋭い問いを、今の私たちに投げ掛けるものでもある。

直接戦争を体験した世代は益々減るし、次に戦争を知らない世代が、戦争体験を継承しなければならなくなる。どのようにしてということが今後の課題となろう。〈戦後五十年〉を考える意義はそこにある。

田中良子氏は十九号『戦争暴力を廃絶する責任』において、〈戦争は二度とおこしてはならないと決断させたのは、九才の時の八月十五日の体験であり、この世を極みまで愛しぬかれて生きたイエスに従ってキリスト者として戦争暴力に反対してゆく〉といわれる。私自身の場合をいえば、幼い頃、父の中国での戦争体験談を聞かされた体験から、非常時はともかく平和な家庭生活の場において、人殺しの話に興じることのできる父の人間性に疑問を持ったことに始まる。日頃から家族が父のすさまじい暴力にさらされていて、何とかして殺すことはできないかと思案したこともあって、被害者である人々と自分とが同じ側に立つ者として意

識されたのかもしれぬ。父はあの戦争についても、個人としての道徳性にも、みじんも疑いを持たない人であったが、外に向かっては紳士で、世間での評判もよかった人である。〈これが人間なのか。こんな世の中でよいのか。〉当時の歯軋りする思いが今の私の、人間ー社会ー戦争を考える根底にある。

小澤氏は十九号『戦時下における仏教者の二つの姿』の中で、「ーもし真摯な宗教者であろうとすれば、当然おかしいと感じる様々のことがらを何の痛みもなくやりすごしている僧侶たちの日常がある。それはおそらく戦前からの流れの上に形づくられてきたものであろう。戦争責任の反省ーなど考えたこともなく、戦時中自らの果たした役割に全く無頓着なまま、戦前と変わらぬ土壌の上で職業として僧侶をやっている姿と考えた方が良いのかもしれない。」と言われる。

これは宗教者に限らぬ大多数の日本人の姿であったろう。ことに数では多数だが、戦争を主導したというほどの地位に居ず、従って敗戦後の〈公職追放〉にも引っ掛からなかった、職場や地域社会における小さな指導者、真面目に職務に励んだ官吏、たとえば教育者、警察官、下級の軍人など、そして家族の思想を統べる地位にあった〈家長〉の責任と意識の内容に目を向けなければ、戦後の総括にはならないと思われる。

「女は売り買いできる物体だという観念は、村でも町でもあらゆる階層の男性にあったんですよ。」と森崎和江氏は書いている。（三省堂『戦後体験の発掘』）慰安所という近代の国家には例のないような施設を作り、いたいけな少女たちをも狩り立てた陰には、戦争という非常時に加えて、平時からそうした女性観が、社会全体に、個人的には教養もあり良識もある男性たちにも、抜き難く染み付いていたからに違いない。そこになんら罪の意識がなかったからこそ、同じことの裏返しとして、今度は敗戦後すぐ内務省によって、〈性に飢えた米兵から婦女子を守るために〉占領軍向け性的慰安施設（「国際親善協会ＲＡＡ」）設置を指令、実行することが可能となったのだろう。

そして戦時中は〈天皇陛下の御ため、神国のために〉と、身命を捧げて国土防衛の一翼を担わされていた女子青年団員を、今度は〈君たちでなければできない任務〉〈耐えがたきを耐えて、全日本婦人の楯となるよう〉にと、そうした施設へ送り込んだ事実がある。

さらにより多くの女性を集めるため、敗戦の混乱のさなか、住居を焼かれ今日の食にも窮した女性たちの前に、「新日本女性に告ぐ。戦後処理の国家緊急施設の一端として、進駐軍慰安の大事業に参加する新日本女性の率先協力を求む」「女事務員募集。年齢十八歳

以上二十五歳まで。宿舎、被服、食料など全部支給」等、卑劣な目的を隠蔽した欺瞞的な募集がなされたのである。（山田盟子『占領軍慰安婦』光人社）

私が以前、昭和二十二、三年頃舞鶴港で外務省の臨時職員として、外地の情報収拾に携わった人から聞いた話では、引き揚げ女性の内妊娠している人はみな、お腹の子の素性や当の女性の意志を問うことなく、堕胎手術を受けさせられたという。これ以上の詳細は事情があって今では聞くことができないが、その女性たちの中に外地における性的暴力の被害者が多く含まれていたために、異国人の血の混入を嫌った為政者の意志によるものであったろう。もし前記進駐軍慰安所の女性が妊娠すれば、どのような〈処置〉が行なわれたか想像に難くない。

こうした人々の主導によって、日本の戦後社会は形成されてきた。これらはすべて過ぎ去った過去のことで、再び起こらないと保証できるだろうか。また国家とはすべて状況によってはこのように酷薄になれるものであろうか。前大戦中同じような状況は多くの国に存在したろうが、果たして幾つの国がここまで〈非人間的な〉手段をとり得たであろうか。

この問題を追及してゆくと、日本人論あるいは日本人の〈職務意識の特異性〉という問題に突き当たる。職責を過ちなく果たすことと、自己の保身が一体化しており、有能ではあるが視線は内向きで狭い。その結果外には権威的で、当面の職務以外のもの、人権の尊重とか人間としての良心は考慮の外に置き去られる。

こういう人々に限って、自分たちの行為の結果を前にしても、〈国策〉〈上からの指令〉〈時代のせい〉にして、真摯に自分を省みることがない。自覚がないから反省もなく、従って変化もあるはずがない。

血液製剤によるエイズ感染と厚生省、水俣病に関するチッソと国、県の癒着行政、沖縄の基地問題と閣僚の反応等を見ていると、残念ながらこうした性向は過去のものになってはいないようである。

そのように考えてきて、二十号の田ノ倉氏「戦後五十年と私」を読むと、問題を感じざるを得ない。

私が氏の論文の中で特に見過ごすことができないと感じるのは、七ページの〈日本人には、トップが最前線に出て陣頭指揮をすると兵卒が感激するという妙なエートスがある。トップは横須賀の奥深い地下壕の冷房の利いた長官室に鎮座していて、頭だけを働かせていればよいのに－後略〉のくだりである。これは十一ページの「原始古代の戦争・武器も、二十世紀末の戦争・武器も、その残虐性という点では、本質的に同一である」という考え、九ページの「ニューギニアやレ

イテ島の日本兵は、相互に殺し合って、人の肉を食べたそうである。お尻の肉が特に美味いそうだが、餓鬼道も底なしと云うべきであろう」の部分にも関連性があるが、私はこうした考えに絶対反対である。

原始古代の戦争・武器はその残虐性、被害の質、大きさ、非戦闘員も除外しないという点において、原爆や湾岸戦争に見られるものとまったく異なるものである。そして原爆や湾岸戦争における無差別爆撃は、司令官が戦闘場所とまったく離れた場所にいて、命令のままに殺戮を行なわなければならない前線の兵士の感情や、巻き添えにされる無辜の女、子供、老人など非戦闘員の生身の存在に心を閉ざし、ただ破壊と殺戮の効率のみを考えたからこそ、命令を下せたという点を忘れてはならないだろう。そういう意味では司令官は、できるだけ敵、味方の顔の見える場所にいるべきである。氏のいわれる方向へ戦争技術が進歩してゆけば、戦争による惨害は増大するばかりである。

妙なエートス云々についていえば、どこの国でも前線の兵隊は人間というより戦闘の機械、消耗品の扱いを受ける。職業軍人を除いた大部分の兵隊は好きでそこにいるのではない。そのような兵士にとって雲の上のトップが、最前線の自分たちの居場所にまで下りてきてくれれば、めったにないことだけに、感激するのは国籍を問わないと思われる。

また今度の戦争における日本軍ほど、兵卒の生命、人権が軽視された例は（近代以降）世界の戦史にも珍しいのではないか。その結果武器、食料、医薬の補給もろくにされず、負け戦になっても事態収拾の措置を講ずる意思を、始めから持たない司令部に無責任に戦場に放置された兵士たちが、降伏することも許されず、悲惨な状況に陥れられた。司令部は後方で食料を温存しつつ、詔勅が下ったからと死戦をさ迷う兵士等に先立って、平然と降伏して生命を全うした例が多かったのは周知の事実である。それらを無視して、兵士個人に責任を帰するような書き方はあまりにもひどいと思う。こういう発想をする人は、自分をどのような立場に置いてものを考えているのだろうか。また氏の文章からは、言葉に現実感が薄いというか、生活の痕跡が希薄に感じられるのだが、そのこととこうした思考法とは関係がないものだろうか。

あるいは氏はもっと気楽に、僧侶として何か私たちに教訓を示したかったのかもしれない。〈人が人の肉を食べるのは餓鬼道だ〉とか〈（被害を受けたからといって）復讐を考えたら、争いはいつまでも絶えないよ〉と。原爆投下云々、兵士の人肉食事件は、こうした教訓を導き出すための単なるフレイムにすぎないも

のかもしれぬ。

そもそも僧侶の説教というものは、昔からそういうものかもしれない。ということをこれまで仏教の女性差別を追及してゆく上で感じたものである。その場限りというか、一応の首尾は通っているのだが、大局から見ると、仏教の根本に違背することが平気で主張される。そもそも自分のしていることを、根本に照らして見る姿勢が最初から欠如しているようである。

こうした僧侶としての自覚に欠けた態度が結局現状を肯定し、時流におもねり、力ある者に追随する姿勢を生み出してきたのではないかと思われる。

現代は、先に見たような効率や経済性偏重の、〈心情を欠いた知性〉が、至る所に跋扈して私たちの人間性や環境を破壊している時代といえよう。私たちはどのように対決していけばよいのだろうか。

一つは政治的な方向である。しかし前出の田中氏が「私はこの五十年間、正直に言って、いつも焦りを覚えて来ました。すれども、行なえども間に合わない程、日本の国も世界も平和ならざる方向へどんどん行ってしまいます。平和運動はいつも後手にまわっていて、無力で果てしない虚しさを痛感させられて来ました」と、言われることに私もまったく同感である。こういう政治風土における個人の無力さを痛感させられる日頃である。まして非政治的人間である私に、最低限何ができるかを考えると、自分の周囲で行なわれている〈非人間的な事柄〉に対して、声を上げてゆくしかないと思われるのである。私の考えるフェミニズムとは、男と女の戦いではなく、日常卑近の場から、こうした非人間的なものに対峙してゆく思想である。

では実際にどのようにして戦争体験を継承してゆくべきだろうか。やはり女性の立場から〈女性の被害体験を継承していく〉ということを中心にすべきだろう。無防備な女性が戦火にまき込まれた時、どんな目に会うかは、先の大戦に限ってみても、嫌というほどの例証を私たちは持っている。しかしそれが後世の女性の知恵として生きてはいないように思われる。〈あの人たちは運が悪かったのだ—私には関係ない。ああいうことはみんな過去のこと—そんなことが今起こるはずがない〉と。現に〈信じられないようなこと〉が今起こっている世界に私たちは生きているのだが。

さらに知っておかなければならないのが、戦乱は力の弱い女性の地位を低下させるが、混乱を制して新しい秩序を打ち立てようとする勢力は、まず女性の押さえ込みを計る傾向があるということである。それを考

えると、女性にとって戦乱は百害あって一利なしであることを、すべての女性が自覚しなければなるまい。

だが、こうして被害ばかりを言い立てる立場に立つと、渡辺秀子氏が十九号『宗教と戦争責任』に指摘されているように、〈加害者〉としての自覚に欠けるという問題が起こってくる。

確かにその通りだが、女性という共通の基盤に立つことで民族や国籍、被害者ー加害者の立場の違いを越えられないだろうか。我が身で痛さを知ったところの反戦非戦意識は、理論としてのそれよりはるかに根深く有効なのではないかと思われる。

これまでの、無党派的な女性たちをも網羅したした、〈二度と戦争はごめんだ〉という堅い決意がなかったら、憲法九条はとうに廃棄されていたかもしれないと思い、いわば生活者的、皮膚感覚的な厭戦・反戦の思いにも一応の評価をしたいと考えるのである。

だがこうした生活者的反戦思想の足元には、それなりの落とし穴が存在する。一つには言うまでもなく経済的要因であり、二つには自衛の問題である。この二つから様々な難問が派生する。

さらに不況が進んで失業が増大した中で、兵器産業に反対し続けることができるだろうか、どうやって平和な技術とそうでない技術を区別するのか。どこまでが自衛のための軍備なのだろうか。自衛のための軍備さえ持たないで有事にどうするのか。軍備なしで国際社会における発言権は確保できるのか等々である。自衛隊の海外派兵への突破口を開いた先年のＰＫＯ参加問題のように、日本も大国として応分の協力をしなければ、国際社会に顔向けできないというような、町内会レベルの〈論理〉が意外に説得力を発揮する。

ともかくも二国間安保ではなく、広域的安保を。自衛の範囲を越えた軍備は、近隣の緊張をもたらすから反対であるというしかないように思う。

不思議なことに私の幼時、周囲には朝鮮・韓国・フィリピン人などに対して〈なにか怖い、嫌な人たち〉と敬遠する雰囲気があったことを思いだす。それらの人々にこそ、厳しい反日の感情を持って当然の理由があるのだが。自分たちのしたことを見ないで、ただ批判されることに感情的に反発する〈逆被害者意識〉がどこから出てくるのかを見ておくことが、これからの社会の動向を見きわめるために、必要と思われる。

沖縄の少女暴行事件に関して、〈タクシーを雇う金があったら…〉云々の米国の総指令官発言があった。レイプ自体を私は、単なる性的な飢えによるものより、心理的な要因、たとえば社会や周囲の人間関係による抑圧の反動としての力の誇示、攻撃欲、征服欲の発露

と受け取っているので、この発言はその意味からも的はずれと思われるが、社会にもこうした内部から醸成される危険な心理状況というものがあると感じる。

その意味では不況、大震災、オーム事件等を経た今の日本社会は非常に悪い状態にあるようで恐ろしい。今後日本がどういう道をたどるかは、いわゆる〈戦争を知らない世代〉の動向によるところが大きい。

きちんとした歴史教育を受けていないために、過去を知らず、無関心である若い人たちの内、慰安婦問題の詳細を知って、純粋に衝撃を受け、関心を持つ若者もいる半面、抑圧された心理状態にアピールしやすい単純で暴力的なスローガンに付和雷同してしまう若者（中年も老年も心許ないが）も多いのではないだろうか。歴史を死んだものにしないことが大切であろう。

昭和十七年生まれの私が、世間の出来事を意識し始めたのは、二十五年の朝鮮戦争頃からであろうか。当時新聞を読んだはずはなく、ラジオもろくに聞けなかったから、〈またもや戦争が〉という、今も覚えているあの衝撃とやり切れない思いは、私自身のものというより周囲の大人たちのものであったろう。だが半死半生の日本経済はあの〈朝鮮特需〉で息を吹き返したのである。あの朝鮮動乱が始まった折の、日本人の〈また戦争が〉という暗澹たる思いは、心からのものであったと信じるが、しかしそれはあまりにも早く忘れられたのではないか。

冷戦の構造に日本を組み入れるべく、マッカーサーから日本の自衛権を認める旨の発言があり、レッドパージが始まり、下山、三鷹事件が社会をゆるがした。それらを受けて再軍備など反動化のレールが着々と敷かれ、現在の日本のあり方を規定していった。活況を呈し始めた経済から、何とか分け前に預かりたいと熱中することで私たちは、日本の経済立ち直りは、自分たちの流した血の上に築かれているという、朝鮮の人々の厳しい目を省みることもなかったし、自分たちの足元を見定めるゆとりも失っていったと思われる。

厳密に言えば私自身も戦争を知らない世代に属する。しかしこうして振り返れば、〈自分なりの狭い場〉からではあるが、〈戦争〉という巨大で複雑なものの一端に触れる手掛かりとしての〈体験〉はあったように思う。〈戦争を知らない〉者が戦争体験を継承しようと思うなら、やはり自分の体験の重なりの中から、自分の言葉で、〈戦争は嫌だ〉ということを叫んでいかなければならないと思うのである。

了

但馬の国のお葬式

下村　美恵子

晩秋のある日、五人の男の子どもを生み育て、十人の孫の顔を見て、職業軍人だったがゆえに、小さな町の役場の戸籍係長で終わったのを花道に退職した老夫を、なにくれとなく面倒を見て、七十四歳で老妻ミサオが死んだ。小さな但馬の山奥の町はずれの家で…。

残された夫は八十五歳、名は平治。訃報を聞いた人は、死んだのは夫の平治のほうかとだれしもすっかり間違えてしまうほど、昨日まで元気だった妻が、ふっとこの世から消えていった。実際、届いた弔電の中には「このたびはお父上の…」というのがあって、思わずクスクスと笑ってしまうこともある始末だった。

死の看取りはだれもしていない。朝目覚めないだけだったから、夫もにわかにそれが長年連れ添った妻が生を全うした朝だとは思わなかった。いつもの朝がやってきただけだった。けれども妻は死んでいた。

一番にかけつけて泣いたのは、この家の先のゆるやかな坂のうえに住むこの亡き妻の二番目の弟（この弟は故人となって久しい）の連れ合いで名はキクヨ。通称キイちゃん、六十五歳である。長い間母子家庭を内

職やパートで支え、二人の子どもが独立して孫もできて、やっと精神的にも経済的にもゆっくりし始めたころであった。

しかしキイちゃんはミサオのすぐ下の弟、克雄が「長男」であるにもかかわらず、家を継がず神戸で暮らしているのが墓守りの義務の放棄であるとして、克雄とその妻美奈子にはいい顔をしない。

訃報を聞いて駆け付けてきた克雄夫婦を、遠くから憎々しそうに眺めていて、ろくに挨拶していないのは傍目にもよくわかる。

二番にかけつけてきたのは、妻の末妹で名は照子、かっぷくのいい体で軽自動車を器用に運転して、対照的に細くて癇癪持ちっぽい感じの青白い顔の連れ合いを乗せて、やってきた。通称テエちゃん五十八歳。

私はこのテエちゃんの夫ヒロシが嫌いだ。いつもふた言目には「女のくせに」「女というものは」と言うからだ。他の人は気にしていないらしいが、私のカンには十分サ・ワ・ルのだ。

三番目にやってきたのは大阪に住む次男夫婦。車を飛ばして二時間の、この小さな町を実家とする妻と結婚して、少しでも休みが続く日があれば子ども二人を連れて田舎に帰り、夫、妻それぞれの実家に顔を出しては狭い大阪のマンション暮しの窮屈さを、しばし大自然と親の喜ぶ顔で癒していた。通称ケンさんとサッちゃんの夫婦、五十一歳と四十七歳である。

これらの人々は至近距離にいるから、飛んでかけつけられる。しかし長男、三男、五男は関東圏に住むから行動は一拍遅れる。それぞれが妻子と共におっとりがたなで現れたのは、翌日の夕方だったし、大阪に住む四男一家は何も知らずに東京ディズニーランドに行っていたから、翌々日の到着となった。

「りんぼ」と発音していたから、きっと「隣保」と書く、助け合いの近隣組織のことだと思うが、十七軒で昔から葬式や結婚披露のとりしきりを手伝ってくれる家々があって、すでにこの「りんぼ」の男衆たちが、テントを張り机や椅子を置いて香典の受け付け準備を完了し、通夜と葬式の日取りも決めていたので、かけつけたその日が通夜となっていた。

ちなみに私は平治、ミサオ夫婦の男ばかり五人の子どものうちの「長男治彦の妻」である。治彦と結婚した時も、午前は女衆、午後は男衆、夜は親戚すじと三回も「皆さんの仲間入り」のために披露宴を行なったが、当時は〈これさえ済ませばあとは東京で暮らす〉のだからと、ひたすら時間の経過を待って行事を終えればいい気分だった。

ところがどうだろう。平成も七年というこの新時代

に、こんなことが何の意味においてなされるのか、その土地の慣習やら習慣やらを尊重するのが礼儀としても、葬式の運び方にはただただ驚く意外なかったのである。

喪主も夫である平治ではなく長男の治彦となり、妻が亡くなったのなら夫が喪主になるのが自然ではないかと、いくら「りんぽ」の男衆のリーダー格の人に申し入れても、がんとして受け付けない。「りんぽ」という組織は自分の意志が通らないところなのである。

たとえ押し通しても、あそこの家は「りんぽ」を無視したと、後々まで言われ続けるのだ。この後も何かと世話になるであろう老父の行く末を考え、結局私の夫が喪主、私は「喪主の妻」という役を拝命することになってしまった。

洋服の喪服しか用意していかなかったし、田舎では「長男の嫁」として、多少それではまずいかも知れないとは思ったが、あえてそれで済まそうという意志であったので、洋服で整えた。

が、それでは野辺の送りという葬列で、大勢の人の目が一挙手一投足、着物から帯、帯揚げに至るまで見ているのだから「とんでもない！」という女衆の説得に、亡きミサオの和服の喪服を引っ張りだして着がえさせられてしまった。

次々に弔問で通夜の席に着く人々のため、私を筆頭に「嫁」一同は、その日から台所にへばりつきお茶とお菓子でもてなす。不思議なことに通夜も告別式もお客には一切お酒類は出さないのだ。長い長いお経を、僧侶と参列者がともに唱和するので、経文の何番目かが終わったら、テエちゃんが合図してくれるのを察知して、一斉にお茶を出すことになっている。

ガス台にガンガンお湯を沸かし、茶わんを何十個も並べ、合図と共にお茶を運ぶために台所で成り行きを見守っていなければならない。

「嫁」一同はお経を知らない。地元の人たちは経本を必ず手にしていて大抵の人がうまい。信心深いのであろう…と思うけれど、単に「りんぽ」の葬式での習わしを身につけているだけなのかも知れない。あんまり意地悪い見方はしたくないけれど。

お経を唱えることができないのと、唱える気もないのとで、台所は格好の隠れ蓑になったが、ここで「嫁」同士がため息をついても、「いい嫁」はため息さえ許さない。私が一番年上の「嫁」なのに一番反抗的なのだから、いそいそとお茶出しをする「嫁」たちともソリが合わない。台所も第二の戦場なのであった。

平治がかつて町議を経験したことや、団体の役員や

郷土史のちょっとした研究家という縁で、弔問客は押すな押すなの大入りで。通夜が総入れ替えの二部制になったので、お茶出しはてんてこまいの大騒ぎだ。

一部組が読経中に台所の目隠しからそっと外を窺うと、二部組が大勢待機しているのが目に入り、さらにガンガンお湯を沸かす態勢をとる。一部、二部ともそれはそれは長いお経を唱和する。お茶を飲んで退席するのでなく、お茶で喉をうるおしてから、さらに唱和するのである。駄菓子にお茶を這いつくばって配るから、腰が痛くなってくる。

ぶちぬいた二間の部屋の、前方に男、後方に女が座るのは当然の男尊女卑の構造である。空いているところにどこにでも座っていいわけではない。自然に男を上に女は下に固まるのである。

そして一通り通夜の客の波が引けたあと、今度は本当に本物の「通夜」となる。身内の者と親戚一同が一睡もせず、膝に毛布を当てて服のまま一夜を過ごすのである。

頃合いを見計らって就寝するのではない。起きていなければならないのだ。これにはたまげた。東京からの長旅に加え、着く早々に身内の食事の支度とあとかたづけ、通夜のお茶出しと、くたびれはてているのものかわ、今度は文字どおりの通夜をする。

男たちは老父、私の夫、夫の弟たちと順番に風呂に入り、さっぱりした顔でまた通夜の席に着く。ここでやっとビールやお酒が出る。またまたここで女たちは酒の支度にかかるのだ。回り回って私にも風呂の番がきたけれど、何十人も入った風呂にはとうてい入る気はしない。「お姉さんお風呂にどうぞ」と言われてもこれだけは拒否。そしてとうとう滞在していた八日間、来た時の服のまま、着っぱなしのまま、過ごすハメになった。

すっかり肉体的にも精神的にもくたびれはててきた私と違い、自宅で十分睡眠をとっているキイちゃんはじめ、葬式という儀式を手際よくこなしていく快感を味わっているのではないかと思うほど、「りんぽ」の人々は張り切っていた。

葬式の一切が終わると、身内の女たちにはもう一つのしきたりをこなす役目が残っていた。ビールでも飲んでくつろぎたい気分の私だが、キイちゃんやテエちゃんたちのきつい目に送られて、亡きミサオが死の直前まで愛用していた枕と寝巻、布団を即時に処分する作業にかかった。

まず枕。身内の女たち総がかりで枕一個を持って、川原に行く。はさみは使わず、手で枕の袋の縫い目の糸をとってそばがらを出す。ミシンで作られていたら

どうする気だ。幸い手作り枕だったのでなんとかほどけた。そばがらを一握りずつつかみ、それぞれが川に流すのである。どうしてこうするのか説明がない。ああやれ、こうやれとキイちゃんなど特にうるさい。このうるささから早く解放されるためにやっているのに、何も知らないと思ってひどく命令口調である。

最後に袋を振って全部のそばがらを流し、袋も流してしまう。ああ、これでは川はきれいになるまい。公害に加担しているようなものだ。

帰ってすぐ今度は寝巻の洗濯である。ミサオが着ていたパジャマを表裏に引っ繰り返す。水をいれたタライにお湯を入れ、パジャマを女たちが全員手を突っ込んでもみ洗いするのである。洗ったら逆手で絞る。つまりみんな日常と反対にする。「ああそれで水にお湯を入れるといけないって注意されるわけか！」と感心していると、もう鬼の首でもとったかのようにこの行事の正当化をして会心の笑みを浮かべる。

女たちは絞ったパジャマを持って裏口から外に出て、家の北側の軒先に裏返しのまま、そのパジャマを干す。四十九日の法要まで干しっぱなしにしておくのである。

今度は布団。どんな高級な羽毛布団であろうと、ミンクタッチの高級毛布であろうと、とにかく死者の愛用していた寝具は焼き捨てることになっている。なぜだか説明はしてくれない。そういうことになっているというのが、唯一の理由である。

布団類をたたみこみ、ロープでゆわえ、いっちょう上がりである。ゴミ焼却場に運び、金一封を業者に渡し焼却を依頼する。これだって昔はこんなことしなかったはずだ。ゴミ問題の線上での苦肉の策としてこうなったに違いない。要は処分が目的である…と思う。

今度はキイちゃん、テエちゃんの指導のもとに、ミサオの遺品の整理が始まる。私があげたセーターもバックもボンボンと捨てられていく。見覚えのあるブラウスもワンピースもはねられ、還暦のお祝いに皆で買ってプレゼントした紬の着物は保留となった。私は見ているだけで、ミサオの普段着のほとんどはゴミと化してしまった。克雄の妻の美奈子オバサンが、しきりに私に同情してくれる。そっと陰に呼んで「ほんに田舎は大変やわ。疲れんようにな」

私はこの美奈子オバサンとはツーカーで気が合うのでいくぶん救われた気分になったが、この人と親しいことが分かるとキイちゃんの機嫌が悪くなるので要注意である。

義母ミサオは自分の家で、畳の上で、眠るがごとくすっと息絶えた。幸せな死であった。介護や看護で人を煩わすこともなかった。その死を悼むヒマも何もあ

ったもんじゃない。さっさと遺品も処分され、この土地は善男善女の人々が多いと思っていたのに、これは何ということだ。

驚異としか言いようのない記憶力で、経文をそらで唱える人。そこまでなくても、各自が経文を携行してきて、所々を読み取りながら節も抑揚も立派に、ろうろうと声を発する人。善男善女でなくてなんだろう。

それなのに、目はしっかりと個人の行動や振る舞いをチェックするからこわい。特にどうやら義父の平治が八十五歳になっての一人暮らしをすること、長男の「嫁」は老親の面倒を見ないということが次第に周囲に伝わっていくと、私にではなく夫の治彦に様々な人が意見しはじめたのである。

「どうしてそんな嫁をもらったんだ」という論法である。いまさらそんな言葉に驚く私ではないが、家制度がしっかり人々の心の中に正しい規範として残っている手強さを、目のあたりに見た思いがした。平安を願う念仏は上手に言えても、それは本当の善男善女ではないというものだ。

初七日は本当に死後七日目にとり行なうので、みんな忙しい働き盛りの中堅ぞろいの子ども、つまり男たちは七日間も続けて休むため、時々勤め先の会社に電話を入れている。その様子を見て「なかなか大変だこと」と同情を買う。

私も急に一週間職場を離れたので、ちょいと電話をかけると、白い目が三角になって刺してきて「なんてこった」になる。初七日は葬式のあとに便宜的にやってしまうのに慣れているので、この七日間の無意味な待機は泊まり込んでいる十数人の三度三度の食事の支度と後片付け、睡眠不足と寒い部屋、疲労は増すばかりである。

きけばこの町の駅付近での葬儀では、もう初七日も葬式のその日で終わらせているというではないか。それなのにしっかりと七日目に初七日、さらに一週間後にも、またその翌週にも、翌々週にも…と続き四十九日まで法要がとり行なわれる。しきたりである。しかしそこまでは勘弁してもらう。早く帰りたい。お風呂に入りたい。ビールが飲みたい。

子どもまで巻き込みたくないので、葬儀のあとはさっさと帰京させたのは賢明な選択だった。そうそう、私の長男と次男は、野辺の送りという葬列に、喪主の一家ということで棺桶をかついだ。二人は棺の先頭に立ち、素足にわら草履、頭に三角の白い頭巾をくくりつけられていた。あまりのミスマッチスタイルに笑いがとまらなかった。

そういう私も夫とともに頭に白い三角の布を巻き、素足にわら草履ばきなのである。ちょっと忘れ物したからといっても、一歩でも引き返してはいけない。山盛りのご飯に箸を突き刺したまま手に持って、しずしずと葬列に連なる。恥ずかしい。嫌だ。一度は言ってみたがダメに決まっている。

諦めたほうがいい。疲れる。すべてが終わっても葬儀の参列者に、どうも有難うという礼も言ってはいけないし会釈も見送りもとんでもない。まったく不自由な喪主とその妻であった。

右往左往するだけで、結局、キイちゃんやテエちゃんのひんしゅくを買っただけだったのか。亡きミサオを心から悼む気持ちが入り込むスキなどない。とどこおりなくしきたりを踏んでいくことが最優先する。葬式なんてそんなものなのかなとも思う。

でも私はこんな葬式は嫌だ。但馬の山奥の小さな町だが、周りにはポツポツ新しい住民も増えている。すぐ向かいにも三軒の新しい家が建っていたが、この三軒は「りんぽ」に入っていないという。これは何かの期待の予兆のように私には思えた。

＊＊＊＊＊＊　お　願　い　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊　　＊

＊　最近、原稿の集まりが悪く、書く人、　＊

＊書かない人が固定化しているように感じ　＊

＊ます。身近なことで言いたいこと、聞い　＊

＊てもらいたいことはありませんか。　＊

＊　たとえば、この下村さんの書かれたも　＊

＊のには、とても想像力を刺激されました。　＊

＊皆が熱心に長い経文に唱和するという点　＊

＊では、多分真宗ではないか？　それにし　＊

＊ては、故人の触れた物を急いで処分する　＊

＊ところ、川に流すところ、死穢を恐れて　＊

＊のように思われて変だな、と感じます。　＊

＊　中部地方のある所では、このように夫　＊

＊を残して妻が先立った場合、夫を看とる　＊

＊という義務を果たさなかったということ　＊

＊で故人が非難されるそうです。性役割観　＊

＊の極地ですね。　あなたの話も聞かせて　＊

＊下さい。ペンネームも可です。　＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

櫟の会の人々

山田　恵子

板谷さんの名前を知ったのは「ニューヨークの空は澄んで」という彼女の著した本を通してだった。ニューヨークでの衝撃的な禅との出会いと見性体験を綴ったその本に私は感激した。金権にまみれ腐敗した日本の仏教界を通さないで得た彼女の体験は新鮮で明るい光に満ちていた。当時私は禅を始めたばかりでいつもひとりで座っていて、禅を志す人との交流に飢えていた。そのために禅に関する本をあさるように読み、禅に対する思い入ればかりが膨らんでいた頃だった。まるで恋をしているようだった。禅に恋をしていたのかもしれない。

そんなある日彼女の名前をフェミニズムの会と共に新聞に見つけて、私の心はこの人に会いたい、という思いでいっぱいだった。彼女はフェミニズムの会の発足時、シンポジウムのパネラーとなった一人であったという。さっそく会の連絡先である奥田さんに電話して板谷さんの電話番号を教えてもらった。フェミニズムの会にはいったのは言ってみればついでだった。電話の板谷さんはとても感じのいい人で、私たちはずいぶん長い間話していたような気がする。彼女は「櫟の会」という座禅会を主催していて、その会に誘われた私はうれしさに舞い上がらんばかりだった。

櫟の会はそれより前すでに「現代の理想郷を創る」という目標を掲げ、或る出資者の数億円の資金を基にプロジェクトを組んだ会社組織を発足させていた。ゴルフ場開発に当てられていた資金と敷地を提供されたという。そのため当時座禅会は月一回しか行なっていなかった。そのことが少し物足りなかったが、とにかく私は禅を語り合えるグループであるということだけでうれしかった。

初めて櫟の会でグループで座ってみて感じたことは、唾が口にたまってそれを飲み込むのにびっくりするほど大きな音がしたことだった。意外とつまらないことに気をとられるものだ。一度板谷さんが隣に座ったことがあったが途中彼女の存在が消えてしまったような錯覚に襲われたことがあった。

一度プロジェクトの出資者という人物が座禅が終わった直後現われたことがある。その場の空気がさっと変わったことが印象的だった。彼は新米の私の顔をちらっとみた。某政商というが定かではない。

櫟の会で私はNさんという私と同世代の男性と知合

った。Nさんは当時私が愛読していた仏教誌にコラムを連載していて、私はNさんのファンだった。Nさんはすでに単行本を二冊出していて私はその内の一冊を買って読んでいた。Nさんの書く文はどこか不思議世界に片足をつっこんでいるような雰囲気があり、不思議世界が大好きな私はNさんの持つ独特の世界に惹かれた。そんなNさんは櫟の会の体質をある意味で体現していたのかもしれない。

その頃あまり名の知られていなかった大川隆法の本を会員のある女性に勧められて読んだこともある。彼女は「ニューヨーク・・・」にも名前の出てくる板谷さんの親友だった。「紫式部の霊言」というその本は、要するに女性にとって母性が一番大切であるという内容だった。子供のいないらしい彼女に「私みたいに母性を研けない人は仕事をするしかないのよ」といわれたが、専業主婦としての毎日に限界を感じて再就職を始めたばかりの当時の私には不愉快な本だった。インテリ女性の大先輩として紫式部が後輩の女性に教訓を垂れるという体裁の、実は男から女への都合のよい規範の押しつけだった。

会員同士で結婚したカップルも、現在進行中のカップルもいた。結婚したカップルの女性が出産後初めて赤ちゃんを連れてきたところに居合わせたこともあった。言ってみれば櫟の会には家庭的な雰囲気があった。ところがある日、仏教誌のNさんのコラムを読んで驚いた。その夫である男性が交通事故で亡くなったということが書いてあったのだ。国道での正面衝突というその事故も衝撃的だったが、息を飲んだのはその友人の死について彼が綴った内容である。Nさんの知人に死者と話ができる才能を持つ女性がいて彼女に聞いたところ、彼女はその亡くなった友人とすでに話していて「彼はもうすでに神界にいて、神界の偉い人に忙しく何かやらされているそうだ」という内容だったのである。「彼女のこんな奇妙な話を聞いても私には違和感は起こってこなかった」とNさんは書いていたが、私には違和感の起こる内容だった。

板谷さんの「ニューヨーク・・・・・」の本には座禅を深めていくうち前世のことを思い出したという箇所がある。そのせいか櫟の会では座禅の後の懇談の時に前世のことを話すことがよくあった。私は結構前世を考えるのがすきだ。けれどもそれは私にとっては副次的な感心事だった。自分の前世を知ることは面白いことではあっても、私の人生にとってはどうでもいいことなのだ。私とは何者なのか、自分の人生とは何なのか、それも知らないで前世を知って何になろう。

結局櫟の会には一年ほど籍を置いて辞めた。参禅の

回数にしたらほんの数回だった。板谷さんはいつも魅力的だったが、私はどうしても周りの空気に馴染めなかった。私が入会した頃の櫟の会はもはや会社組織の方にウェイトが置かれ、他の人たちと共通の目標を持たない私は、周りの雰囲気から浮き上がっていた。私が櫟の会で得たことといったら、唾を飲み込むときびっくりするほど大きな音がするという事だけだったのかもしれない。

その後私は或るお寺の座禅会の会員となって座禅を続けていた。

櫟の会を辞めてどれほどたった頃だろうか。ある日Nさんから一枚のはがきが届いた。パステル画の個展を開くという案内状だった。なつかしさのあまり電話をかけたNさんから返ってきたのは、板谷さんの会社を辞めたという意外な言葉だった。

それから数日後、私ははるばる電車を乗り継いでNさんを個展会場まで訪ねた。そこでNさんと、彼の友人と、三人でお昼を食べながら話した会話は主に板谷さんの会社と、そこを辞めるまでの経緯だった。「現代の理想郷」とはレジャーセンターだったこと、それがわかった時点でメンバーが分裂し、たくさんの人が離れていったこと、Nさんももう少し頑張れば失業手当てが数か月分増えると分かっていたのに、もう一日たりとも我慢ができなかったこと、等々。Nさんの友人の「座禅をするのにどうしてあんな立派なホテルでするんだい？」といった言葉が印象的だった。

私は現代の理想郷など少しも信じていなかったので、彼女の企画する事業がどんなものなのか全く関心はなかった。そしてNさんの言葉に納得した。かって「夢」とか「理想」といった言葉で人集めをして社員を酷使する会社に勤めていたことがあったので、そんな言葉が企業経営のなかに出てくることには拒絶反応があった。

私はNさんの絵を一枚買った。色彩の美しい不思議な絵だった。

それから数か月してNさんから二度目の個展の案内が届いたが、その時は都合がつかずいけない旨の返事を出した。

その二度目の個展の案内状からほんの二、三ヵ月後のことだった。愛読している仏教誌にNさんの書いた文が久しぶりに載っていて、それを一読するや否や、私は茫然自失となった。「このプロジェクトの統率者である一女性との大ゲンカの挙げ句」とある。そうか、Nさんはただ板谷さんと喧嘩しただけだったのか。「彼女の並はずれたパワーと常識をはるかに超えた言動に驚き、怒り、悪魔憑きと罵ったが、しかしどうやら

私の誤解だったようである」との文に私は二人が仲直りしたことを知った。しかしそれは「悪魔憑き」と罵りあうような喧嘩だったのだ。さらに「修羅場になった。私自身は彼女の強引なやり方を悪魔的と決め付け、ある時は痛烈な非難によって彼女を泣きわめかせ、またある時は逆に徹夜で吊し上げられる苦しみを味わった」という。

私にはもう何もかもが分からなくなった。これほどまでに激しい罵りあいや徹夜での吊し上げが、坐禅をする人達の集まりで行なわれていたのだ。そのような恐ろしい経験をしたことのない私には、どんな状況かを理解することは出来なかった。あそこまで非難していた人と和解できるというのも理解不能だった。

板谷さんはその後離婚して櫟の会のメンバーの一人と再婚したという。私の部屋には今もNさんの描いたパステル画が掛かっている。私は結構その絵が気に入っていて、それを見るたびに櫟の会の不思議な世界を思い出す。

世界女性会議・NGOフォーラムに参加して

千葉　悦子

昨年の9月、私は世田谷区派遣団の一員としてNGOフォーラムに参加する機会をもった。個人的に関心を持つのは“カトリックの中のフェミニズム”についてだが、今回は区からの派遣という性格上、個人的な関心は控え、同じく前々から関心を持っていた「日本のマスメディア」の問題を自分のテーマとした。

（ちなみに派遣員は8名で、他の人たちのテーマは「高齢者問題」「女性と教育」「生殖技術」「アジアの中の日本」等。）

北京会議では、団体行動ゆえの制限と中国事務局の運営の不手際からくる混乱とで“宗教問題”のワークショップには残念ながら参加することができなかった。そういった事情から、この会報の趣旨とは離れてしまう事をご了承願った上で、私が昨年、北京会議の為に関わっていた「マスメディア」の問題、そして私が訪れた中国の印象、4ヶ月たった今感じている事などを書いてみたいと思う。

◎日本のマスメディアの女性の描かれ方

北京会議へ向けた研究テーマとして日本のマスメディアの問題、中でも「日本のＣＭに見られる性別役割分担と性差別」にポイントを絞った。日本のＣＭは技術的には高水準にありながら、それを支える思想はフェミニズム視点からすると貧弱としか言いようがない。ＣＭというものの影響力の大きさを考えると、この問題は私にはとても看過できないものだったし、ワークショップをする場合、映像という形は外人にも分かりやすいという利点もあった。漠然とながら、メディア問題に関心を持つ人々の前で発表出来ればと思っていた。出発までの主な取り組みは、次の様なものだった。

○「差別的ＣＭに抗議する女のネットワーク」を作る。

全国にはいくつかのメディアウォッチングの団体があるが、私が目指したのは、不快なＣＭを見た時、他のメンバーにＣＭの内容をＦＡＸで知らせ、受けた人は各自任意にスポンサーに抗議の電話を入れるという簡単なもの。多くの人にネットワークへの勧誘文を配布したあと、４人のコアメンバーを立て、アクションをおこした。いくら抗議しても何の反応もなかったものの、逆に制作責任者まで意見が届いたケースもあった。

○“アジア女性会議ネットワーク”の北京準備合宿に参加する。

全国的な組織である“アジア女性会議ネットワーク”が７月に一泊二日の北京準備合宿を行った。私は会員ではないが、他の人達の取り組みを知りたいと思い参加。「表現とメディア」分科会に参加し、メンバーの方々と知り合う。

（アピールに向けた具体的な準備）

○電車内の中吊り広告を収集する。

毎日嫌でも目にする電車の中吊り広告。水着のアイドルはセクシーな挑発ポーズ、男は筋肉隆々の強い男、というパターン。電車のポスターは日本では一種の「風景」になってしまい、女性でさえ気にもしなくなっている。これらを北京に持って行こうと考え、目に余るポスターを時々拝借し、２ヶ月間で２０枚以上を収集。

○テレビＣＭを集めたビデオテープを編集する。

８月中旬の一週間をビデオ製作（膨大なＴＶ録画ビデオの中から問題と思えるＣＭをピックアップして編集）にあてる。これが準備の中では最も手間のかかる作業だった。編集に詳しい友人にも手伝ってもらったが、ＣＭ約一五０作品、５０分のテープをつくるのに徹夜続きで丸々５日間かかった。（主な収録ＣＭとしては、白人女性の裸体にブラインドの縞模様が映る趣向の「タチカワブラインド」のＣＭ。性差別、年齢差

別あふれるカップヌードル「麻婆」のCM。上半身裸の女性がカンを持ちながら歌を歌う「爽健美茶（コカコーラ）」のCM。“主婦”しか登場しない家電製品のCM、等々。

◎北京にて

9月3日、世田谷派遣団は北京入りした。私のトランクには衣類の他、ポスターやCM関係の資料、ビデオテープ、液晶ビューカムとそのバッテリーが入っているのでとても重い。液晶ビューカムを選んだのはほんの小さな画面ながら、8ミリに録画したものをその場で見せられるからだ。製作したCMビデオは8ミリにもダビングして、最悪の場合、通りがかりの数人にだけでも見せられるようにした。なにせきちんとした形で発表できるあてもなかった。

ところが北京に着いたその夜遅く、私の滞在しているホテルに“アジア女性会議ネットワーク”の方から電話が入って、自分達のワークショップでビデオ機器が使える事になったので是非一緒に参加してほしいという。“アジア女性会議（メディア部門）”のワークショップは翌日だ。我々の派遣団は市内視察の予定だったが区のスタッフに頼み込んで、私はフォーラムに参加させてもらう事にした。大勢の前での発表はほとんど諦めていたので、舞い込んできたこの幸運に感謝した。

ワークショップは4日の午後3時からフォーラム会場内の中学校の教室で行われた。発表内容は「新聞に見る性差別表現・広告と公共芸術における女性表現・テレビCMウォッチング」の3点だった。私の担当は最後の「CMウォッチング」で持ち時間は20分とのこと。教室の壁一面に私の持参した車内広告が貼られている。教室には各国の女性達が大勢集まってくれていた。

私の番が来て次のようなスピーチをした。“こういった車内広告やテレビCMを見てもらうとわかるように、日本のマスメディアの根本には差別的な女性観があって、差別的な表現が毎日再生産されているが、私達女性はそれを変えようと努力している”。それからビデオテープを5分間、CM数にして20程度見てもらい、その後、全体のディスカッションとなった。その中で印象に残ったのは、スウェーデンの女性の意見で、“スウェーデンでは性差別表現の法規制案が出たが、最近否決された。国は大手企業を擁護するものなのでコマーシャルを法律で規制する事は今後も難しく、違う方法を模索すべきだと考える”というもの。又ブルネイの放送局に勤める女性から、“自分の国はメディ

アも発展途上だが、今後発展する上で、日本のようにならない為にはどうすればいいのでしょうか”という問いかけもあったりした。

わずか20分程の発表だったが、その準備には当然大変な時間を費やした。仕事も家庭も持つ身には時間の捻出は楽ではなかったが、このワークショップを目指す事なしには行動の一つ一つ…ネットワーク作りやCMスポンサーへの抗議活動、そして計画途中での多くの人達との出会いはなかった。そしてワークショップの経験から、次の機会には更に良いものが創り出せるという自信が生まれた。ワークショップへの参画が私にとっての大きなエンパワーメントになったと思っている。

さて、帰国後、いくつかの報告書を書き、いくつかの報告会にも出た。去年9月の当会の例会でも簡単に発表させて頂いたが、会の後、以前から仏教に関心を持ち、現在日本に住んでいらっしゃるオーストラリア人のMrs.イシバシからこう話しかけられた。

「本当に日本のマスメディアの女性の描き方はひどい！　日本人はそれに無感覚になっているでしょう。私には小さな息子がいるのですが、電車に乗りますよね、隣のサラリーマンがポルノ雑誌を平気で読んでるので子供の目にも入ってしまいます。いくら私がガードしようとしても日本にいる限りそういう影響から子供を守る事が出来ません。日本に住んでいると女性を尊敬できる人間は育たない気がします。正直なところ、子供の為に早くオーストラリアに帰りたいのですよ」。日本で仏教の勉強を続けたい気持ちはやまやまだろう。日本の女達はもっと女を取り巻く環境に敏感にならなければならないと思う。

町を歩いていてポルノチックなポスターを見かける度に、Mrs.イシバシの「女性を尊敬できる人間が育たない国」という言葉が脳裏によみがえってくる。今後とも日本のマスメディアには関心を持ち続けていきたいと思う。

◎中国という国

さて、もう一つ、書いておきたいのは中国という国についてだ。中国政府は会議の開催直前になって、北京市内に決まっていたNGOフォーラム会場を急遽北京から55kmも離れた懐柔区に変更した。よく言われたのは、中国の人権問題をNGOの団体に刺激させる事を恐れたからだという事。中国はどうやら世界へのアピールと国威高揚の為に世界規模の会議を開催したかったらしい。政府間会議だけでなくNGOフォーラ

ムがもう一つのメインであるという認識がなかったようだ（フォーラムには全世界から3万人の女達が集合）。そういった噂を裏付けるように、フォーラムでは中国政府の非協力的な姿勢が随所に見受けられた。帰国したばかりの頃、私は北京行きを支援してくれた友人達に次のようなFAXを送った。

「9月3日に北京に立ち、9月4日に帰って来ました。NGOフォーラムに出席した感想を一言で言うなら・・・「最悪」です。残念ながら。

どういう事かと言いますと、中国はNGOの参加者に政治的な活動をされる事を非常に恐れ、一般市民との交流は一切禁止。ホテル内で他人の部屋に立ち寄る事も禁止。ホテルの要所要所には私服の公安が立ち、私達がエレベーターに乗ると、公安が一人乗ってくるという念の入れよう。極め付けは北京から片道2時間という会場への距離です。行くだけで、もうへとへと（これ、中国政府の思うつぼ）。会場に入れば確かに活気はあるものの、これだけ一般市民から隔離された場所となると何をやっても「コップの中の嵐」でしかない。おまけに“インフォメーションはしない”という中国の体質には参加者は始終イライラ。肝心なワークショップの予定表が全く手に入らない。手に入ったと思えば変更が多くて役に立たない、そんな事が日常茶飯事です。ヒラリーさんの演説の時など私達は朝6時のバスに乗り（ということは4時半起き）、2時間バスにゆられ、ざんざんぶりの雨の中を演説会場前に1時間半並び・・・結局、中に入れなかったのです。この間、一切のインフォメーションなし！NGOフォーラムの閉会式もひどいものでした。“女性問題”以前の問題が山積みの国でした。（後略）」

今読み返すと、ずいぶんあからさまに不満をぶちまけたものだと思うが、なにしろ飛行機恐怖症の私が、“墜落して死んだとしても後悔しない。女性会議のためなら！”なんていう覚悟までして行った北京会議だった。第一回～第三回世界女性会議の非常にエネルギッシュな状況を伝え聞いていただけに失望も大きかったのだ。同じ感想を抱いた参加者は多かったに違いない。

そして日本に戻ってはや4ヶ月。中国の印象が「最悪」なものであっても、中国のニュースはやたらに耳に入ってくる。中国の人権活動家達が北京会議の期間中、どこかへ隔離されていたという事を後で知った。天安門事件の悲劇の後でも、国を変えようと命がけで闘う人々はいるのだ。

又、世界から集まるマスコミ対策の為に政府は町の

浮浪者や物乞いの人々を一掃したそうである。どうりで北京市内が不気味な程清潔だったわけだ。あの時、北京で会う中国人といえば政府から派遣された“優秀な”中国人通訳者や無言、無表情な警官ばかりだった。私など“民衆の息吹が感じられない”などと言いながら、まんまと当局のねらいどおり、見たままを信じただけなのだ。そしてTVや新聞で中国の経済改革路線のひずみ、台湾問題等、中国関連のニュースを見聞きする度に、同じアジアの隣国についてあまりにも無知だった自分を恥じざるを得ない。

昨年11月に『画魂』（上海、台湾合作）という映画を観た。時代に翻弄されながらも絵を描く事への情熱を貫いたパン・ユィリャンという実在の女流画家の半生を描いた見ごたえのある映画だった。人を愛し、嫉妬に苦しみ、表現の自由の為に闘う、つまり熱い血潮の流れる等身大の中国人達がスクリーンで息づいていた。“人間”が描かれる事、その事が今の中国にとっては充分に体制批判である。最近の日本映画に比べ、中国映画界の底力は見事としか言いようがない。人間を取り巻く壁が厚ければ厚いほど、創作へのエネルギーはほとばしり出るという事だろうか。

12月の初め、世田谷派遣団の報告会が開かれた。私は参加したメディアワークショップについて話し、中国を見て来た印象も話した。聴衆の中に5年間北京に住んでいたという30代の女性がおられ、会の後、私に興味深い話をして下さった。

「9月には私はまだ北京にいたんだけど、「世界女性会議」がどんな会議なのか、どんな議論が交わされているのか、市民は分からなかったんですよ。連日TVで流されるのは、専ら女性達の「友好」と「交流」の場面ばかりで。中国政府批判をしたヒラリー・クリントンの事は一切報道されなかったし、彼女が来た事さえ市民は知らなかったと思う。

でも国民はTVや新聞のニュースは「報道」ではなく、「広報」だという事をよく知ってるんです。例えば一昨年のことなんだけど、発砲事件の犯人である軍人が射殺されるっていう出来事があったんです。

当日、ニュース報道は全然なかったのに、午後たまたま乗ったタクシーの運転手が事件の一部始終を知っているので、「ラジオのニュースでもあったの？」と聞いたら「この国ではニュースなんかないさ。だからオレ達の情報網はすごいんだヨ」という返事が返ってきたんです。中国は「上に政策あり、下に対策あり」という言葉があって、それはこのことかと思いましたよ。私は、夫が中国に仕事で赴任したので一緒に行っ

たんだけど、仕事の関係者としか付き合えなかった夫と違って、中国語を習うために学校に通ったおかげで、私はいろんな中国人と知り会えて面白かった」。民衆はしたたかなのだ。このしたたかな市井の人々の存在を忘れないようにしようと思う。

“百聞は一見に如かず。”今回の旅はその一言に尽きる。これまで書いた以外にもいろいろな事を―例えば日本政府が戦後補償や従軍慰安婦への謝罪をきちんと行なわない事で、私達日本人がアジアに行くと、どどんな目でアジアの人々に見られるか。例えば日本にいれば空気のような存在で気づかずにいた、言論の自由―完全とは思わないが―というもののありがたさを。また例えば、いったん日本から離れると日本人のアイデンティティーは意外にあやういものなのだという発見、―そういったもろもろの事を肌身で感じてきた。

今後とも、機会があれば様々な国に行ってみたい。そして様々な事を見聞きし、自分の既成概念を壊して来たい。今はそんな風に思っている。

新入会員からのメッセージ

岡村　聡子

「フェニミズム・宗教・平和の会」という名前にひかれて昨年入会しました。ミッションスクール（プロテスタント）で幼稚園から高校まで育ち、大学は臨済宗系の大学（専攻は社会福祉）を卒業。学生時代「生きる意味」を問うてキリスト教に救いを求めたが得られず、坐禅をしたらもっと混乱し、長い間神経症でどん底の精神状態を経験しました。田川建三さんの宗教批判の姿勢に非常に共鳴し、以来「イエスという男」は私の聖書です。（だから当会の九三年の田川氏講演会の顛末をうかがって、驚き混乱してしまいました。）

私は一九五七年生まれ。団塊のひと世代後の年回りです。高度経済成長期に思春期・青年期を送った消費社会の落とし子の世代といえるかもしれません。団塊の世代に強く影響を受けつつ、でもあなたたちの言うことやることは、私の感じていること、やりたいことどこかが違う、と思い続けてきました。入会してwomanspiritのバックナンバーを一読し、私はまたも思いました。「皆さんとっても真面目で真剣。だけど堅くて面白くないなあ。このノリにまざろうと思うの

は、ギリギリ私の世代が最後。べき・ねばメッセージでは人は変わらないよお」初期の薄い冊子はほとんど異端審問。ヒャーこわ。フェニミズムってこんなにこわいもんなの？　もしフェニミズムが私を生きいきさせず、私に枠組みを強いるのなら、私はフェニミズムなんていりません。別にフェニミズムだけが唯一絶対の真理じゃないもの。

あー、こんなこと言ったら怒られそうだなあ。私、本当は２０号の田ノ倉さんが書かれた文章を批判したいと思って原稿をおひきうけしたのでしたが、（「太平洋戦争の開戦と敗北を何等後悔していない…」など、仏教者として戦争責任を自らに問うたことがあるのかなあ、この人…と思ったんですけど）、いちいちあげつらうのもなんかめんどくさくなっちゃったんです。でもこの会のきらいになりきれないところは、こういう「エー、こんなのも載っちゃってるのー？！」という文章もさりげなく機関誌にちりばめてある懐ろの深さ（というより、いい加減さ、というべきでしょうか）です。いいよなあ、こういうの。これはきっと、奥田さんの強靭かつしなやかなお人柄によるものなんだろうな。私、奥田さん大好き。

さて、客観的に判断すると、こうした会には若者（１０代２０代）にアピールする魅力がない。「宗教」「フェニミズム」いずれも、とりあげ方によっては若者に関心のない分野ではないはずなのに。この会が、世代交代なしで行けるところまで行くだけならいいの、インテリで専門家のお勉強会なのっていうんなら別にそれでもいいんです。

けれど若年層や私のような一般大衆にプロパガンダしていく気がもしあるのなら、ご紹介したいのが文化人類学者の上田紀行さんによる問題提起なのです。『宗教クライシス』の中で彼は、現代を生きる人間が何故宗教を求めるのかを分析しています。現代は「私のかけがえの無さ」が失なわれた時代であり、その中で「絶対的な私」を人々がさがそうと試みているといいます。尾崎豊の死の意味やオウム真理教の分析など、他人事ととらえず内側から分析がなされていて、その姿勢に共感します。上田さんは私と一歳ちがい。やっと同世代の信頼できる学者が現れたな、と心強く感じるこの頃なのです。

彼が若者向けに書いた「トランスフォーメーションワークブック」。自分を変えるマニアル本です。バカらしい、と思うけど、これが案外真面目な内容なんですよね。やってみよう！　というお気持ちのある方、いつでもパートナーをおひきうけいたしますので、どうぞお申し出下さい。（パートナーと連絡をとりあっ

てワークする形になっているのです。笑っちゃいますけど。）

私がやっている諸々の活動（セクシュアリティーとエイズを考えるグループ、フェニミストセラピー、横浜寿町の保育園に古着を届ける活動など）について書きたいと思いましたが、エネルギーがなくなってしまいました。やっぱりこの会の会報に軽いタッチで文を書くという試みにはすっごいパワーがいります。軽くしなやかになるために、今しばらく心のマッサージを続けなくちゃと思います。

１９９５年活動報告

3月18日　例会　菅原征子さん
「日本古代の理想の庶民女性像」

6月24日　例会　ジョアキン・モンテイロさん
「戦後五十年と仏教」

7月24日　東京都女性情報センター
利用団体連絡会

9月30日　例会　川橋範子さん
「仏教とフェミニズム―アメリカの女性研究者による対話の試み」

12月10日　例会　田光礼さん
「カナダの先住民女性とチベット女性の活動」

会計報告

（95、12、31現在）

《収入》

繰越	185,275
会費	231,000
冊子売上	53,690
参加費	4,200
カンパ	10,000
計	484,465

《支出》

印刷費	136,000
送料	61,980
講師お礼	11,643
文具代	10,800
コピー代	1,340
会場費	1,400
計	223,163

現在高　261,302.

編集後記

一九・二十号は、「戦後五十年」をテーマに原稿が寄せられた。今回は、それを承けて、さらに深めた形で・・・と計画したのだが、原稿が思うように集まらず、結果として、テーマなしということになった。鶴岡さんがワープロを打つ傍らで校正をしながら、じっくり原稿を読ませて頂いた。さまざまな形で問題提起されているテーマを、会員による話し合いの中で、さらに深めていくことができたらと思いながら。

女たちの戦争責任を、今現在、私たちが考える上で、見逃すことのできない社会現象の一つに、S会の動向がある。この会は宗教（？）を母胎に政治を動かす力を持つ迄に肥大化してきた。この団体を支えるのは“婦人部”といわれる女性たちである。

アエラ（1月22日号）の「S会婦人部の素顔」という記事のタイトルには―I会長は夫越える存在―とある。「S会はある意味で、今の日本では見かけなくなった家父長制度をそっくり残している組織」だという。

こうした婦人部の体質は『女たちの〈銃後〉（加納実紀代著）』で指摘された国防婦人会のそれと相似たものを感じさせる。当時の女たちにとり「国防婦人会が〈解放〉と自己表現の機会を与える」ものであったように、「婦人部が一番働いている」と評価される彼女たちの働きぶりは、I会長の「思いのまま忠実に動く戦力」になり果てている。信仰（？）という名の割烹着をつけた女性たちが、選挙軍団となる。全国で上部を占める男たちの指令に基づき、動き廻っているさまは宗教に関わる女性として震撼させられる。

日蓮の偽書かもしれないとされる遺文に基づき政界に進出しているS会において、その信仰とは“S会員に非ずば人にあらず”という論理に貫かれているらしい。選挙により政権を奪取する一方、日本社会の枢軸を会員の手に納めることが目的だとか。

マスコミにおけるS会批判はタブー視され、一般人には事態がどこまで進行しているのか、はっきりつかめないこともなにやら戦時中を思わせる。

自分たちの属する組織がどこに向かって動いていくのか、何をしようとしているのかを真に見通している女性がどのくらいいるのだろうか。S会の女性会員に感じる疑問は、私自身に対する問い掛けでもある。

（永井三千世）

Womanspirit No.21

一九九六年三月発行

発　行　フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先　〒一八〇　武蔵野市関前五－五－二五

奥田方

T／F　〇四二二（五三）八七四六

郵便振替　〇〇一七〇－九－八〇三一

定価　六〇〇円

印刷　（有）オクノプリント社